写真解説

①筆で文字や絵を描く「文字書き人形」②「琴弾き人形」の仕掛けを調整する進さん③立ち姿で4本の矢を射る「弓射り武者人形」④興業用のからくりで唯一現存する「金太郎」⑤琴爪を付けた指を弦の間に正確に運ぶ「琴弾き人形」

特集2 伝統と技を受け継ぐ

からくり人形の歴史は意外に古く、平安時代の「今昔物語集」にその記述がみらます。花開くのは江戸時代。その伝統と技を寝屋川市から発信する〝匠と弟子〟の親子に迫ります。

問　企画三課（☎813・1146）

夢のからくり人形誕生

昨年12月、仁和寺町の工房で一体のからくり人形が完成しました。「琴弾き人形」は親指に付けた琴爪で弦をはじいて演奏。実際に楽器を奏でるからくり人形は世界初で、制作した東野進さん（71歳）は「江戸時代の職人技を持ってしてもできなかった夢のからくりです」と語ります。

東野さんは26歳のとき、骨董市で「茶運び人形」を買い求めたのが、からくり人形との出会いでした。

幕末から明治時代に活躍し、〝からくり儀右衛門（ぎえもん）〟と呼ばれた田中久重（ひさしげ）の文献などで独学。真ちゅうや鯨のひげで作られたゼンマイを動力に、複数のカムに連動する糸で複雑な動きを操る人形の仕掛けに引き込まれました。

江戸時代の伝統と技伝承

人形の胴体は多くが木でできています。動きを伝える部分は堅いカシやサクラが使われていますが、湿度などの影響を受けやすく調整も難しいといいます。

「歯車や動作を制御する〝カム〟を作る際にもミリ単位の修正が求められますが、その分滑らかでしなやかな木製ならではの精密な動きが魅力です」。

墨を含んだ筆で「寿」などの文字を書く「文字書き人形」や「弓射り童子」など久重の傑作を修復。立ち姿の武者が矢を射る現存しない人形も再現しました。

この功績が称えられて、平成22年に黄綬褒章を受章。伝統と卓越した技は、二男の秀規さん（35歳）に受け継がれます。

からくり人形とは？

糸やゼンマイ、歯車などの仕掛けで自動的に動くように制作された人形で、全盛期の江戸時代にいろいろな仕掛けが登場。大坂・道頓堀のからくり芝居は人気を博し、文楽や歌舞伎にも影響を与えたとされています。同じ機械仕掛けの人形ではヨーロッパの「オートマタ」が有名です。

▲段返り人形

伝統を親から子へ 寝屋川から世界へ

親から子へ

「跡を継いでほしいと言ったことはありません」と進さん。高校生の頃から作業を手伝っていた二男の秀規さんも、「継ぐつもりはなかった」といいます。

進さんは、秀規さんが5歳になった頃に天才からくり師・田中久重作の「弓曳(ゆみひ)き人形」を発見し修復。未知の人形を発掘し、秀でた修復技術は広く知られるようになり、平成19年には厚生労働省の「現代の名工」に選ばれました。そんな父親の後ろ姿を見て育ち「このままでは日本一の技が途絶えてしまう」と危機感を持ち、20歳のときに父親の跡を継ぐ決意をしました。

秀規さんが最初に制作したのは、曲芸師のようにでんぐり返しをしながら階段を降りる「段返り人形」でした。

「まさに生きた人形。天候によって動きも微妙に変わり、そこがまた面白い」と、その魅力を語ります。

進さんは建具職人の父から木工技術を学びましたが、「手先は私より器用。もっと技を磨いて幻のからくり人形を一つでも復元してほしい」と2代目に期待をしています。

江戸東京博物館学芸員の松井かおるさんは「伝統と精巧な技術の継承は親子だからこそできることもあり、貴重な文化財を守ってほしい」と話しています。

国内外で実演、パリでは大入り満員

▲江戸東京博物館で実演する秀規さん(中央)

東野進さんが制作したからくり人形は国内外で披露。江戸時代の技術で再現された複雑な動きで多くの人を驚かせています。

平成18年に江戸東京博物館で開かれた「夢大からくり展」では、田中久重の「文字書き人形」の実演に専門家も感心するほど。35日間の期間中に18万4000人が詰めかけました。

3年前にはパリで開かれた日本文化を紹介するイベントに参加し、6点を持参しました。

秀規さんが人形を動かして実演した2日間は大入り満員。武者が放った矢が5m先の的に当たると、パリの人たちは拍手喝采でした。

今年11月にはエジプトの博物館でも実演予定で、進さんは「琴弾き人形を披露し、日本の伝統と技を世界に伝えたい」と話しています。

▲興味深そうにからくりをのぞくパリの人たち

夢のからくりに情熱注ぐ

病に倒れ琴弾き人形制作へ

準備から8年。夢の「琴弾き人形」は、従来のからくりの構造にとらわれない発想で完成しました。

過去に三味線を弾くふりをするからくり人形はありました。しかし、実際に楽器を弾く人形は海外でも見つかっておらず、琴弾き人形を作ることは長年の夢でした。

ところが平成23年2月に脳こうそくで倒れ、半年間入院。「医者から命も危なかったと言われました。右半身に障害が残りましたが、生きているうちに実現させたい」と、翌年から制作にとりかかります。

逆転の発想で難題克服

琴を奏でる仕組みはこうです。台座の中のぜんまいを動力として、動きの方向を変える円盤状のカムが回転します。凸凹に刻まれたカムに連動して腕木が上下し、糸でつながった両腕や胴、首が動いて指先の爪で弦をはじきます。

しかし、胴体が動かない従来の人形では指が弦まで届きません。そこで胴は前後、上下に、両腕は左右も動くようにしました。

「カムと腕木が並ぶ従来の配置ではうまく作動しないこともわかり、並びの前後を逆にしました」。まさに〝逆転の発想〟です。

演奏する頭脳は3枚のカム

最後の難関は、曲の音程を正確に再現することでした。一つの音を出すには、弦の手前に指を差し入れ、爪で下から上向きにはじきます。この指の動きを制御するカムを制作したのは秀規さんです。

カムは、コンピューターでいえばソフト。「3枚のカムで立体的な動きを再現するのですが、弦の押さえ加減を凸凹の溝で調整し、精巧に動かすカムを作るのは気が遠くなるような作業でした」。

完成したソフトは「さくらさくら」と「荒城の月」の2曲。わずか1分間の演奏ですが、左手一本で作業を続けた進さんは「全てのことを自分一人ではできなくなり、秀規が重要なカム作りを担ってくれたことが大きかった」と話します。

国立科学博物館・産業技術史資料情報センター長の鈴木一義さんは「当時の技術を使って実際に楽器を弾いたり吹いたりする人形はみたことがなく、ヨーロッパのオートマタにもありません。すばらしい人形です」と話しています。

▲「琴弾き人形」の仕掛け。カム(左)が回転することで腕木(右)が上下に動き、人形を制御する。

寝屋川市独占配信

からくり人形を動画で見てみよう

市公式YouTubeで、東野さんのからくり人形が琴の演奏や、文字と絵を描く様子を配信しています。

動画は右のQRコードから見てください。

貴重な収集品「将来は地元で公開したい」

東野進さんは31歳のとき、近隣市から寝屋川市に移り、手がけたからくり人形は全て仁和寺町の工房で修復、再現してきました。

東野さんの功績は「からくりの世界」だけにとどまりません。国立科学博物館の専門家に師事し、医学や交通などの貴重な資料を収集。静電気を発生させるエレキテルや明治時代の自転車、鉄道関係の図面など、これまで扱った資料は数万点に及びます。

その一部は全国の博物館が収蔵。平成5年の江戸東京博物館開館時にも資料収集で協力しました。現在も千数百点を所蔵。東野さんは「寝屋川市を拠点に長く活動し、将来は地元への恩返しの意味も含めて市民の皆さんに見てもらいたい」と話しています。